

「ヒストリカル・エリア・スタディーズ」に込めた 工藤先生の思い

金井 光太郎

工藤光一さんとは「ヒストリカル・エリア・スタディーズ」という科目の設計、教育を共にしたことが印象深い。東京外国語大学が語学・文学に加えて地域研究を明確に専攻分野として位置づけるようになってゆき、現在は国際社会学部として学生にはさらに専門的な学問体系が求められるようになっていく。卒業論文執筆が全員に必修となり専攻分野での専門教育の深化が必須の課題となった時、専門教育に入る段階でしっかりとした学術的基礎を教育する必要が意識された。地域研究コースを担当する教員がそうした導入教育をリレー講義で開講することで、専門課程に進んでどのような勉学を選択し、そして卒論のテーマを選びリサーチを進めてゆけるようにするか、模索してきた。常識的な諸国の事情を学ぶことでは地域を学んだことにならない。高校での教育を受け世界各国や諸情勢について習い、興味を持って入学してきた学生に、考え方や見方の大転換を迫るのが、本学での地域研究の基礎となるべきだとの思いで「ヒストリカル・エリア・スタディーズ」という科目を立ち上げた。

そうした専門的地域研究教育の基礎を固め鍛える必要に、歴史研究に携わる教員が何とか答えてゆきたいとの思いを共有した。その頃には歴史学においても国民国家概念そのものが大きく再検討を迫られ、国家や諸地域はある時期に構築されたものであり、ナショナリティや地域の「本質」とされてきたものがいかに人為的に選択され歴史的に創造されたものにすぎないかが、明らかになっていた。工藤さんが強調していたのは、地域が固定されたものとしてそのエッセンスを探り整理した上で学生に伝える、といった授業であってはならないということである。彼はピエール・ノラ編『歴史の記憶』の翻訳に携わり大きな刺激を受けて、その成果を地域研究の新たな方法にも取り入れることを考えていたのだと思う。フランス史について様々な表象が特定の時期から特殊な時代背景をもって代表的なものとして強調され、広まってゆく過程に関心を持っていた。教授会の合間の

雑談でも、ヴェルサンジェトリクスやジャンヌ・ダルクやマリアンヌ像などの話を語ってくれたことを思い出す。それらが19世紀のナショナリズム高揚に伴い神話化されたにすぎないことに驚いた。国民国家の典型であるフランスのナショナル・イメージが当たり前となるにも、何らかの理由背景があつてのことなのであつた。

そうした思いを共有して、複数の教員が担当するにしてもヒストリカル・エリア・スタディーズとはどのようにあるべきか、担当者が集まって考えを述べ、コース案内を書いては皆でコメントしてし、修正して概念を鍛えていった。私の書いたシラバスのイントロダクションに対しても忌憚のない意見をぶつけて意欲的な内容作りに努力を惜しまなかった。その頃闘病生活に大変な苦勞をしていた時期であつたのにもかかわらず、工藤さんは以下を含む長いコメントで助言をくれた。

お考えでは、「エリア・スタディーズ」を自明の前提とはせず、学生に自らどのような学問であるかを考えさせるために、「エリア性」を問うことを課題として標榜されているようにお見受けしましたが、この授業創設時には、「エリア」よりもむしろ「ヒストリカル」に力点が置かれており、「地域研究（エリア・スタディーズ）」をやる場合に、歴史的な視点が不可欠であることを具体的なトピックに即して学生に理解させることを目指していました。来年度の授業につきましても、そのようなイメージを描いておりました。ですから、私の場合、現代から出発して、ネーション意識をめぐる現代の相克が歴史的に構築されたものであることを、「戦争の記憶」と「ナショナル・シンボル」（具体的には、ジャンヌ・ダルクとフランス共和国を象徴した女性像マリアンヌ）に焦点を当てながら、具体的に見て行く授業を構想していました。

改訂のイントロダクションで、本授業を受けることで「世界の中で自分自身の位置も見つめること

12 「ヒストリカル・エリア・スタディーズ」に込めた工藤先生の思い

となろう」締めくくったところ、この「一文は、歴史的アプローチを取ることの意義として、私自身も行間で言いたかったことであります」との共感を頂くことができた。

工藤さんの問題関心、歴史的視点を受け継ぐことは、教育研究はもちろんのことであるが、それにとどまるものではないであろう。ナショナリズムに大きく傾く時代を迎え、そこでの流れを冷静に見つめてネイションに固定されない自分の位置を確かめて守ってゆくことが肝要であろう。

(かない こうたろう・東京外国語大学総合国際学研究院)